

## 図書館利用教育への取り組みの課題

大学改革が急速に進行するなかで、大学図書館もまた大きな変貌のなかにある。情報化の進展は、大学図書館に対して、逆に大学改革の先導的な役割を課してきている。文系・理系といった学問領域の融合化や環境学など学術研究の複合化が進んでおり、研究者の共同した取り組みが大学図書館の改革のなかで求められている。各自の研究室に配架された図書の補完としてだけでなく、図書館機能の共有化作業が大学全体として不可欠である。特に個々の研究室サービスに留まらず、大学図書館が大学全体としての支援体制を確立することが必要である。この学術研究支援のあり方は、教育学習支援への変化へと連動する。

学術研究とともに、大学が持つ大きな役割の今一つの学生教育の課題は、大学改革のなかで大幅に遅れ、取り組まねばならない重要課題である。大学が大衆化の時代に入り、青年の多数が進学するといった状況にあわせて大学教育も再編されなければならない。読書離れが引き起こされ、課題発見の力が弱くなってきている学生に対して、教育学習館としての大学図書館は何をすべきか。学生の知的好奇心を刺激し、学びへの意欲を喚起する教育環境として大学図書館を位置づけ得るのか。課題探求を援助しうる大学図書館として充実すべき内容を明確にする必要がある。

大学図書館の教育学習支援は、利用者教育と呼ばれる取り組みを入り口としている。学生に図書館を使いこなせる力を育てつつ、同時に学習・研究能力をも培うこととなる。情報リテラシーを育てることで、万人に必要な学習能力を培うこととなる。この図書館利用教育が大学図書館の重要な使命として自覚されず、一部の学生に留まって、全学生の教育体系のなかに位置づけられてはいない。

さらに、教科書を超越資料を用いた学習が指導でき、子どもたちに図書館の利用を促す教員を送り出すべき教育大学として、図書館利用教育の役割は大きい。図書館活用能力を具えた教員を養成するために、図書館利用教育の実態を明らかにし、学生の意識を分析した。未だ図書館利用教育は、一部のものの取り組みであり、学生への学習・研究支援システムとして大学内で確立していない。学生においても、教員となるうえで必要不可欠な能力とは自覚してはいない。学生を含めた大学構成員全体として教育改革を進めるためにも、図書館利用教育を位置づける必要がある。